
メルボルンの8月は寒い時期だということが少しずつ慣れてきて、当たり前になってきました。同時に、日本のあの暑い8月をどこか忘れてしまっている自分に気が付きました。そしてそれは、日本の暑さだけではなく、決して忘れてはいけない8月6、9日の広島・長崎の原爆の日や、15日の終戦記念日さえも、どこか忘れてしまいそうな自分がいることに、気が付きました。人類史上最大の戦争であった第二次世界大戦は、今年で戦後72年になります。戦争がどんどん遠い過去の出来事になっていって、戦争を体験した多くの人々が既に召されました。そして、戦争の本当の恐ろしさを知らない、体験したことのない私達世代が今、生きております。そういう意味では、戦争の恐ろしさを本当には知らない私達は、「戦争は決してしてはいけない！」ということ、彼ら以上に真剣に語ることが出来なくなっているようにも思います。言い換えれば、彼らは戦争がいかに恐ろしいものであるのかということを経験し、知っているからこそ、「戦争は絶対に駄目だ!!」と、その語る言葉にも力があり、なにより説得力があるように思います。体験し、知っているからこそ言える言葉です。

しかしそれは、戦争のことだけでなく、何事でも同じように思います。そ物事を体験し、知っているからこそ、語ることが出来る。そしてその言葉には力があるのではないでしょか。

そしてそれは、今日の聖書箇所に記載されている弟子たち、すなわちクリスチャンによる宣教ということも同じだと思うのです。

本日の箇所はマルコ6：7-13です。この箇所には、『イエス様による12弟子の宣教派遣』ということが記されています。それでタイトルを「弟子による宣教」とさせていただきます。

この6章まで来ますと、弟子たちもいよいよ自分たちで宣教に出かけて行けるほど、信仰が成長してきた。ということが考えられます。

前回は、イエス様が12弟子たちを連れて、郷里のナザレで宣教活動を行われたところでした。そこでは、イエス様のことを、その幼少期からの生い立ちのすべてを知っていた町の人々が、「この人は、大工じゃないか。」また「マリヤの子ではないか・・・兄弟姉妹たちもここに住んでいるではないか」などと言って、『イエスにつまずいた』と記されていたように、イエス様のことを「来たるべきメシヤである」とは、多くの人が考えることも、また真剣に受け入れることも出来ませんでした。彼らは、自分たちの知っている過去の一部の知識が妨げとなり、純粋な心で「イエス様」というお方の全体を正しく見つめることが出来なかったのです。

この時、12弟子たちは、イエス様が町の人々から扱われているその姿に、内心、『自分たちは、本当にこのイエス様を来たるべきメシヤとして信じて良いのだろうか?』と、もしかしたら町の人々と同じように疑問やつまずきを覚えたということもあったかもしれません。

けれども弟子たちは、イエス様の郷里伝道を通して、これまで見えなかったイエス様の過去の出来事をも知ることが出来ました。そしてそれは、「大工である」とか、「マリヤの子で、兄弟姉妹たちもここに住んでいるではないか…」等ということだけであって、決してイエス様について「彼は不正な者であった」などという悪い評判や批判の言葉は一切なかったということでした。そしてそれは後に記されている、イエス様の十字架刑のための裁判の時にも、誰一人、イエス様の不正を訴える者が、どんなに探しても出てこなかった。という事実からも確認することができました。ですから12弟子たちは、「やはりこのイエス様とは、過去を振り返っても、まったく不正がないお方である!」ということに、ますますイエス様に対する信仰が強められたのではないだろうか。というのを、前回の最後のところで確認させていただきました。

そこでイエス様は、12弟子たちの信仰があつた郷里伝道の出来事を通して、揺るがなかったことを見て、感じて、弟子たちをいよいよ福音宣教へと遣わすことにした。ということが、今日の箇所ではなかったであろうかと思うのです。今日はこの箇所から、大きく3つに分けてご一緒に考えていきたいと思います。

I. 宣教と準備

①弟子

イエス様は、まず12弟子をお呼びになられました(7節)。それは、この弟子たちによって、イエス様が宣べ伝えている福音宣教を、この弟子たちにも行わせるためです。そのためにイエス様は、この時彼らと呼ばれました。ある意味では、弟子たちは、ようやく弟子として、活躍できるようになってきた。ということです。ですから12弟子たちとしては、自分たちは選ばれた12人だ! ということで、この時、宣教への士気が上がってきたかもしれません。

けれども弟子というのは、彼ら一人一人が、『自分には信仰があるから』、『自分には能力があるから』、『自分には人よりも賜物があるから』などという、いわゆる『自分は〇〇だから』という理由で、弟子とされたわけではありませんでした。

イエス様は、12弟子を選んだ時に「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためです・・・」と言われました。ですから弟子というのは、どんな人であっても、イエス様が召してくださいからこそ、弟子として迎え入れられている。ということです。逆を言えば、召されているのに、『自分にはできません。』ということは、誰も言えないということです。

イエス様は、弟子たちがご自分に代わって福音宣教をすることができる十分な器である!ということ、その人よりもすべてを理解しておられるうえで、弟子として、ひとりひとりを招いてくださいました。それは12弟子だけではなく、私達クリスチャンひとりひとりも同じです。賜物、能力のある・なしに関わらず、イエス様の弟子として、召し与えられたのです。

イエス様は、そのように弟子たちひとりひとりを呼び、招いて、そしてあらゆる出来事を通して訓練してください、いよいよ御自身の福音宣教の働きのために、呼び集めてくださいます。そして宣教という働きに遣わしてください。この働きは、イエス様の弟子でなければ決してできないことです。つまりクリスチャンでなければ出来な働きです。イエス様を知り、体験している者だからこそ力強く証することが出来るのです。それが弟子でありました。そしてその弟子が、この時イエス様に「呼ばれた」のです。

②二人ずつ

イエス様は、弟子たちを宣教へ遣わすときに、「ふたりずつ遣わし」ました。それは個人的に、勝手にそれぞれが行きたいところに行って、やりたいようにやったということではなく、イエス様は二人一組として遣わしました。おそらくこれは、二人以上は駄目で、絶対二人一組限定というのではなく、共同体としての最少人数=二人として、イエス様は彼らを組にしてそれぞれを宣教へと遣わした。ということです。ですから、大事なことは「個人的に、一人で、めいめいが勝手に…」ということではなく、複数人を一つの組にして遣わしたということです。

聖書にはこのように記されている箇所があります。「申命記 19:15 どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」、またイエス様はマタイ18:16で、「ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。」と言われました。つまり宣教での全ての事実とその出来事が、はっきりと確認され、神の前にも明らかにされるためには、「ふたりか三人」という複数人での行動が必

要であるということです。そしてそれは、すべてが神の前に言い逃れすることが出来ない出来事として立証されるということです。ですからこのように、事実を立証するために「ふたりずつ遣わし」と、複数人で宣教を行うように、指示を出されたと考えることが出来ます。

もう一つ考えられるのは、同じ弟子であったとしても、それぞれが賜物や能力、また性格も違いましたので、必ず仲良く宣教活動が出来たとは限らないということです。そこには当然、衝突もあったでしょう。あるいは、一人の弟子がずっと自分の考えで突っ走ったりすることもあったでしょう。反対に控え目な弟子は、決して自分の意見を言わないということもあったでしょう。さらにその「ふたりずつ」という組分けは、イエス様によってなされはずですから、色んなことで自分の都合に合ったものではなかったはずで、『あの人とが良かった……』『この人とでなければ宣教に行かない……』などということは言えなかったはずで、ですから彼らが、本当に主の弟子として、お互いに一致して行けるかどうか！というのが、非常に大切であったと言えます。言い換えれば、それこそが「互いに愛し合いなさい」という主の教えの中心であり、実践だったとも言えます。互いに愛し合い、協力し合い、主の御心を一緒になって求めて一致して行くこと、決して誰かひとりの意見やまた人間の考えということで決めるのではなく、主の福音を共に伝えるという神の働きです。そうした彼らの信仰による愛と一致の姿を通して、語られる神の国の福音を、具体的に信仰者は行いをもって証しながら、人々に伝えることが出来た。ということだったのではないのでしょうか。

ですから「宣教」というのは、まず自分は賜物や能力があって出来るからというのではなく、反対に無いから出来ないというのではなく、召されたクリスチャンによって成されるのであり、そしてそこには本当に主にある信仰からくる愛と一致が必要である！と言えます。反対に、クリスチャンの間に信仰による本当の愛と一致がない時は、福音宣教は前進して行くことが難しい！という、厳しい言葉にもなるのかもしれませんが。もし私達の宣教が進んでいないとするなら、今の私達の交わりは果たしてどうなのだろうか？と考えなければならぬのではないのでしょうか。

③宣教への持ち物

8-9節で、イエス様は、宣教への持ち物として、弟子たちに指示を出されました。そこには、「杖」を持っていくということと、そして「靴」は履きなさい。ということ以外は、パンも、袋もお金も、また下着さえも2枚は持って行ってはいけません。と言われました。つまり、ほとんど手ぶら状態です。ちょっとした散歩ならそれでもいいでしょうが、そういうわけにはいきません。イエス様も8節のはじめで「旅のためには」と、この宣教は、「旅」であると語られました。また10-11節を見ても分かる通り、この宣教は、宿泊を伴ったある程度の期間を要するものでした。

それなのに、ほとんど持って行っては駄目だと指示され、一方では、「杖と靴」良いと言われました。聖書によればこの「杖」とは、一貫して「神からの権威の象徴」として記されています。モーセも、アロンもこの「杖」をもって、エジプトをさばき、海を分け、また民を導きました。そしてアロンの「杖」は神の箱にそれが納められました。また黙示録では、後にイエス様御自身が「鉄の杖」をもって民をさばき、治めるとも記されています。あるいはダビデのように羊飼いたちは、「杖」をもってあらゆる災いから羊を守りました。そこには、敵から身を「守る」道具としても用いられていますが、同時に羊とヤギを選び分けるような「選び」を意味する道具としても用いられました。結局すべて、神の権威象徴として、「杖」は用いられました。ですからこの時、弟子たちがその「杖」を持って宣教の旅をしたというのは、まぎれもなく神の権威を帯びた神からの使者である。ということの宣言だったのではないだろうかと思えます。

こうして神からの使者として宣教する弟子たちの「杖=神の権威」によって、人々は裁かれ、また導かれ、そして選び分けられていったということです。今日、私達に与えられている神の権威としての「杖」というのが、

まさに「聖書」です。私達はこの「聖書」という神からの「杖」を通して、すなわち「神のことば」を通して、人々にさばきを宣告し、また導き、選び分ける働きをします。この「聖書」という「杖」は、非常におそろしい神からの権威です。私達は皆、この「杖」を持っているということです。

さて次に、「靴」ですが、まず簡単に考えられるのは旅の安全のためであったということでしょう。それから出エジプトの過ぎ越しの時には、「…足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは、主への過越のいけにえである。出エジ12：11」と、神が民へ「靴を履き、杖を持って」と、脱出に備えるように命じました。これは、これからの新たな旅に対する備えのことです。おそらくイエス様も出エジプトの神が語ったあの出来事と同じように、彼らに、新たな旅に向かって出発するということを、明確に意識させた。ということかもしれません。それが「杖」と「靴」は持ちなさい、履きなさいということであったのではないのでしょうか。

一方、持って行ってはいけないお金、食糧、着替え、袋(カバン)というのは、人間的に考えれば、どれもそれが無ければ生活していくのに困るものばかりです。けれどもイエス様は、その生活に必要なものをあえて持っていけないようにと、イエス様御自身が命令を出しました。つまり、この宣教の旅で必要に困った時の責任は、「持っていくと命令を出したイエス様御自身にある」と言えます。弟子たちはそのように命令を出したイエス様とその御ことばを信頼して、宣教に出ていかなければなりません。

これはなかなか出来ないことです。必要な物が無いということは、容易にその先は大変になるというのを想像できるので、つい自分ですべてを備えたくくなります。しかしこれは、弟子=信仰者が、本当にイエス様を信じているのか。また御ことばを信じているのか。という、自分自身のイエス様に対する信仰を深く知り知るためにも必要な信仰の訓練であると言えます。そしてイエス様の御ことばを信じて行動していった先に、イエス様は確かに全てを備えてくださっていた！ということも、また神は確かに生きておられる！ということも経験することができるのです。そしてこの経験が、宣教に力を与え、さらに説得力のある宣教の言葉となっていくのだ！ということではないのでしょうか。

II 宣教の土壌 (現実)

10-11 節で、イエス様は「また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまっていなさい。もし、あなたがたを受け入れない場所、また、あなたがたに聞こうとしない人々なら、そこから出て行くときに、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」と仰いました。また並行箇所のマタイ10：16では、「いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、オオカミの中に羊を送り出すようなものです。」と記されています。つまり、この宣教の土壌、その現実とは、全ての人が自分たち信仰者を受け入れてくれるのでは、決してないということです。そこには厳しい現実があるということ、イエス様ははっきり弟子たちに伝えたのです。そしてこれは今も同じです。私達の宣教の土壌は、決して穏やかな場所ではありません。仲の良い人たちだけで楽しく過ごすことができる場所だけではないということです。

しかし、そうした現実の中で、確かに受け入れてくれる者たちもいるのです。そして、その受け入れてくれる人々を通して、宣教は拡大していくということです。今日その代表が教会です。教会は福音を受け入れた者たちが集い、そしてこの場を通してさらに宣教は拡大していきます。教会こそは福音を受け入れる土台となる場所です。

イエス様はこの時、弟子たちを宣教へと派遣しました。それは出かけて行ったということです。けれども今日、教会は出かけるというより集まる場所となっているように思います。ですから、私達はむしろ出かけて行って、受け入れてくれる場所をさらに求めていかなければならない。ということかもしれません。具体的に言えば、クリスチャンの家々、そして教会員のお家を拠点として宣教を行うということが、挙げられると思います。そうし

て受け入れてもらえるところを通して、福音宣教は、さらに拡大していくと言えます。

さて反対に、宣教を受け入れなかった人々へは、「証言として足の裏のチリを払い落とさない。」とイエス様は弟子たちに言われました。それは、「福音を聞いて拒んだその責任は自分にある。」という意味です。これは、そのための弟子たちの行為であり、神の前に証言とされるものです。

イエス様は、「福音を受け入れない人へは語るな。」とは仰いませんでした。そうではなく、語っても受け入れない場合は、「証言として足の裏のチリを払い落とさない。」と言われたのです。ですから、私達は受け入れない人がいるから語らないということではなく、あくまで全ての人に語る必要があります。しかし、福音を語られた人々が、福音を受け入れるか受け入れないかは、その人の責任となる。ということです。そして言い逃れが出来ない証言として足の裏のチリが払い落とされるのです。これは物凄く恐ろしい神の裁きの宣告とも言えることです。こうした宣教の土壌、現実が、私達の目の前には広がっているのです。

Ⅲ 宣教の内容

12-13節には「こうして十二人が出て行き、悔い改めを説き広め、悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。」と記されています。これはイエス様から教えを忠実に聞いて、そして忠実に実行した弟子たちの宣教の内容の報告です。弟子たちは、ここに記されている通り、まず初めに「悔い改めを説き広め」ました。新改訳の脚注には、「悔い改めるべきことを」とあります。イエス様は宣教の初めのマルコ1:15で、「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」と言われました。つまり福音宣教の最も大事なことは、「神の国が近くなったので罪を悔い改めよ」ということです。もっとわかりやすく言えば、「宣教とは神の救いを教え、罪の悔い改めに人々を導く」ことです。そして神の救いとはイエス様でのことであり、罪の悔い改めとは、罪の指摘とも言えます。なぜならその指摘により、悔い改めるべき罪というものが分かるので、人々は罪を悔い改めることが出来るからです。

バプテスマのヨハネは、まさに罪を指摘し、罪の悔い改めを説き広めました。私達が「宣教」という時に、この罪の悔い改めに導くこと、すなわち罪の指摘をすることと、また神の救いであるイエス様を教えることを躊躇している場合は、本来の「宣教」とは言えないように思います。

パウロはⅡテモ 1:7で、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびよりの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」と記しました。またⅡコリ 10:4では、「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」と、クリスチャンたちに、自分たちの持っている福音の力のすばらしさを伝えています。また詩編36:1には「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。」と記されています。罪は神を恐れさせません。罪は神を認めることが出来ないのです。ですから私達は「宣教」をする時に、人の顔色をうかがいながらではなく、罪を指摘し、人に罪を認識させ、神の救いの必要を伝えなければならないのです。そしてそれは、この罪がどれほど苦しく、悲しく、残酷で、また醜く汚れに満ちたことであるか！ということ、私達は知っているからこそ伝えることが出来ます。また同時に、救いがどれほど素晴らしいものであるのか！どれほど恵みにとんだものであるのか！ということを知っているからこそ伝えることが出来るのです。

パウロは、使徒の働き26:17-18でこのように語っています。「わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。」

12弟子たちは福音宣教を通して、人々の罪を指摘し、罪の悔い改め(悔い改めるべきこと)を説き広めました。そしてそれは、同時にサタンの支配から神に立ち返らせる神の救いのわざでありました。そしてこれこそが、罪

の悔い改めを説き広めた時に成されていった「悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。」という汚れた霊を追い出す権威のあらわれであったと言えます。私達も 12 弟子たちのように、神に遣わされて福音宣教をしていくその先に、「悪霊を多く追い出し、大ぜい・・・を・・・いやし」という、神からの権威と奇跡の御業がはっきりと輝くのです。そしてこれこそが主の「弟子のよる宣教」なのです。

アーメン。